

MEDIA メディア ウオッチング

オシムと過ごした50時間、
その豊穡なる矛盾を愉しむ。

田邊雅之=文
text by Masayuki Tanabe



『独破力』

天才と呼ばれた少年時代から「リーグで活躍した日々の記憶、さらにはフランスリーグへの移籍で得た糧や、今夏のW杯南ア大会に掛ける決意まで。日本屈指のドリブラーが語りつくす」(松井大輔著 PHP研究所 1400円+税)



『監督論』

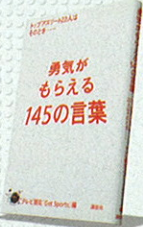
日本シリーズを制した25人の名将

1950年から2009年に至るまで、計60回に上る日本シリーズを制してきた監督たちの方法論を詳細に解説。水原茂や鶴岡一人、三原脩といった懐かしい名前も並ぶ。巻末の詳細なデータも有用(永谷脩著 廣済堂出版 1400円+税)



『南アフリカワールドカップ 観戦ガイド完全版』

W杯南ア大会に出場する全32カ国を、選手リストやシステム図、戦績等と共に紹介。他にもグループリーグ展望や試合の見所解説、有力選手のインタビューやコラムもあり内容は充実(加部究他著 ネットスクール 1200円+税)



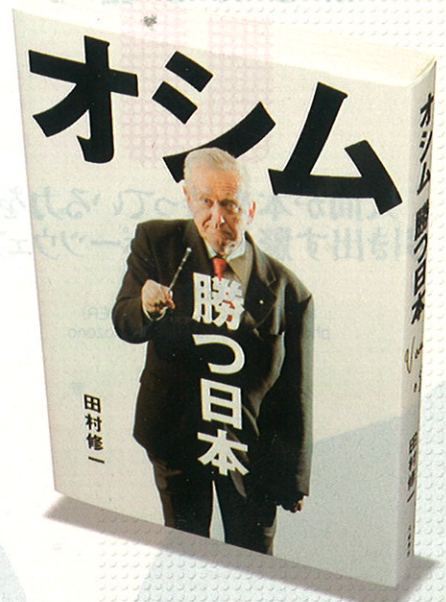
『勇気がもらえる145の言葉』

高人気を誇るスポーツドキュメンタリー番組において収録された、22人のアスリートの名言を掲載。「逆境に立たされたときに効く言葉」等、カテゴリー毎に分類されている(テレビ朝日「Get Sports」編 講談社 952円+税)

田村さんはロストバゲージ。カメラマンのT君は風邪で悪寒に震え、編集担当の僕は機内食にあたって吐き気が止まらない。2008年9月に始まったオシムの取材は、のっけから波乱含みだった。しかしインタビュ自体は無事に終了、「オシム・レッスン」と題した連載が決まる。以後、現在に至るまでの50時間、僕たちは彼のサッカー観だけでなく、人間性についても深く知る機会を得た。大の日本好き、そして非常な人性格である点は、評判に違わなかった。

も輪島塗の器でもなく、絶版になった豪華な歌舞伎の写真集だった。人格者であることを示すエピソードは、それこそ枚挙にいとまがない。パプのテラスなどで取材をしていると、オシムの周りには自然に人が集まる。サッカー関係者やファンだけでなく、アルコール依存症やホームレスと思しき人が輪に加わることもあるが、ぼろぼろの服を着て地べたに座っているような人が相手でも、オシムは嫌な顔一つせずに15分、20分と根気よく話を傾ける。しつこく物を乞われた場合でさえ、その態度は変わらなかった。サラエボ市内には、数名の子供を使つて体よく金品をせがむ手合いもいる。しかしオシムは迷わず小銭を渡し、自分の料理を分け与え続ける。アシマさんに譲られても、頑

として止めようとはしない。かといって、オシムを聖人君子のように捉えるのは誤りだろう。尊敬に値する人物である反面、彼はきわめて人間臭い素顔も持ち合わせている。取材が始まった頃は、白ワインをペリエで割つたものを飲んでいて、いつしか水とアルコールの比率は逆転。最近では、地元ビールを「特製ジュース」と称して美味そうに呷るようになった。大変な照れ屋で、写真が嫌いなのも相変わらずだ。T君にプレゼントされた額縁入りの写真を自宅に飾つたりしているのに、カメラを構えた瞬間に表情は一変、険しい目付きでレンズを睨み出す。それでいて興が乗れば、茶目つきたつぷりにサービス精神も発揮する。本書の表紙にも使用された写真を撮影すべく、



『オシム 勝つ日本』

田村修一著
文藝春秋 1333円+税

ペン型の指示棒を渡したときのこと。こちらはオシムが教壇に立つ光景をイメージしていたが、本人はオーケストラの指揮者を連想したようで、僕たち相手に嬉々としてタクトを振り続け、最後は深々と頭を下げた。オシムとはかくも愛すべき、そして矛盾に満ちた人である。僭越を承知で言えば、この特徴は彼のサッカー哲学にも相通するのではないかと。ゼレスニチャールからユーゴ代表、シユトルム、ジェフ、日本代表に至るまで、オシムは常に「弱者」を指揮してきた。しかし彼は、ありきたりな「弱者の戦い方」——ひたすらに守備を固めてカウンターを狙うような戦術には与しない。むしろ失うものがない立場であればこそ、リスクを冒してでも勝機を見出そうとする。オシムとは弱者を率いながらもスベクタクルなサッカーを実践し、さらには結果を残すという、鼎立させ難い目標を追求した稀有な監督だった。故にオシムの言説は、ときとして矛盾に満ちたものとなる。おそらく本書を手にした方々も、最初は多分に戸惑いを覚えるに違いない。

だが諸兄姉には、あえて「矛盾」を愉しんでほしい。繰り返し投じられる深遠な問いは、日本サッカーの未来を考える最良の触媒である。と同時にそれは、ボヘミアンクラスのようにまばゆき光を乱反射する、イビチャ・オシムという人間の紛れもない一部なのだから。